

林政ジャーナル

No. 8

1993年3月30日

発行所

日本林政ジャーナリストの会

〒107 東京都港区赤坂1-9-13

日本林業協会内

電話 03-3587-1210

第15回定期総会報告

第15回定期総会は、2月18日東京・内幸町のプレスセンターで開催し、1992年度活動報告、同決算、1993年度活動計画、同予算を審議し原案どおり承認されました。今年度は「山村は生き残れるか」を年間テーマに活発な活動を展開することにしています。

また、任期満了に伴う役員改選が行われ、別項のように幹事及び監事が決まり、会長には中西實（元共同通信論説副委員長、新任）、副会長には高田浩一（朝日新聞、新任）、二村寛壽（林業経済新聞、留任）、事務局長吉藤敬（広報センターA&F、留任）。監事は石井健雄（日本緑化センター、留任）、村田貢（元林野庁広報官、留任）が選出されました。増田俊二前会長、大谷健前副会長は顧問に推戴しました。

総会終了後、下河辺淳先生より「山村の活性化に向けて」と題して特別講演をいただき、さらに馬場林野庁長官、角道農林中金理事長、甕前農林事務次官、小澤前林野庁長官らの来賓を囲んで懇親会を行いました。

幹事＝杉本一（顧問）、森巖夫（顧問）、増田俊二（顧問）、大谷健（顧問）、畦倉實、五十嵐英明、伊東靖郎、植松寛茂、岡 智、小野田法彦、加倉井弘、岸康彦、黒川宣之、栗原喜一、高地英壽、白井正信、高田浩一、辻五郎、寺山義雄、中西實、滑志田隆、二村寛壽、箱崎道朗、古野雅美、松沢譲、森田稲子、矢島勝夫、山地進、吉藤敬。

監事＝石井健雄、村田貢。

幹事懇談会ご出席のお願い

総会の決定により、毎月第二月曜日の午後六時から約一時間、林野庁内林政記者クラブで、幹事懇談会を開き、会の運営、研究会の持ち方等を協議しています。幹事の皆さんはお忙しいことと存じますが、できるだけご出席下さいますようお願い致します。なお、幹事懇談会は、定例行事ですのでその都度連絡しておりませんので、悪しからず、ご協力下さいますようお願い致します。

山村に追い風が吹き始めた

会長 中西 實

さる2月18日開かれた日本林政ジャーナリストの会第15回総会で、はからずも会長に選任されました。責任の重さを痛感している今日この頃です。

私は会長に選任されたあと「原点に戻ろう」とあいさつしました。原点とは、会則にもあるとおり人間と自然とのかかわりあい、今どきの言葉で言えば「共生」です。林業、林政のあり方などすべて自然との共生を出発点にして改めて考えよう、と言いたかったのです。

93年度活動計画では「山村は生き残れるか」を年間テーマにすることが決まりました。私は日本人が森林という自然との共生を上手にやって行けば、山村は立派に生き残れる、活性化すると思います。上流（山村）が駄目になれば下流（都会）も駄目になることが、国民の間でようやく理解され始めました。新農政で「中山間地域対策」の重要性がきちんと位置付けられ、緊縮財政にもかかわらず森林・山村対策費が大幅に増え、また木材市況の好転など「追い風」が吹き始めています。

こうした時期だけに、私たち林政ジャーナリストの会の活動はますます重要にならざるを得ません。幸い新任の副会長に高田浩一さん（朝日新聞）が就任され、林政通の二村寛壽さん（副会長、林業経済新聞）、吉藤敬さん（事務局長）が留任されました。前会長の増田俊二さん、副会長の大谷健さんは顧問として引き続き活躍されます。みんなで会を盛り立てて行きたいと思います。会員諸兄弟のご協力をお願いします。

山国の現状を広く知らせる一石を

副会長 高田 浩一（朝日新聞記者）

この度、はからずも大役をまかせられ、任務を果たせるかどうか分かりませんが、よろしく願います。当会に入ってから、智頭林業、吉野・熊野の杉、木曾のヒノキ、宮崎の耳川の流域一体経営など共同取材で勉強、かつ周辺の観光を楽しませていただきました。いずれも、当会でなければできなかったことと、先輩のみなさまのお計らいに感謝しています。

若輩で、森林や林業の現状について、必ずしも通じているわけではありませんが、ジャーナリストとしての念願はヤマの今の姿を広く報道することです。

最近、長期連載された高知新聞の『山よ』によりますと、金銭的にはあまり恵まれない山仕事が大変なのがよくわかります。作業中にハチにさされ顔を腫らしたり、夏はマヨネーズの空いたチューブに麦茶を入れ前夜から冷蔵庫で凍結させたものを携え、暑さをしのぐということです。国土の3分の2が山林のわが国で、美林があちこちにあるのは、こんな苦勞があるからでしょう。だが、林

業就業者11万の68%が50歳以上、国有林の赤字2兆5000億円などに象徴される窮状は多くの国民が知らないのではないのでしょうか。木村尚三郎東大名誉教授が「今の子供で木の名を5つ以上あげられる子は極めて少ない」と言っていました。世界的にも代表的な山国であるのに不自然なことです。一石が投げられればと思います。

《新会員紹介》

宮本 忠 (共同通信)

田辺 義雅 (共同通信)

〔特別講演〕

山村の活性化に向けて

（株）東京海上研究所理事長 下河辺 淳

一般的に日本の森林を語るときには、人々は山を下り過疎化・高齢化が進み無人化というところまで来た。林業はととても採算が合わない、国有林も大赤字だしどうしようもない、というコンセンサスが専門家の中に出来上がっていて、軟膏を塗るような対策はあったにしても、根本的には駄目だという感じではないかと思う。しかし、二つ目のコンセンサスが出来て、林業経営は難しい、山村も難しいけれども、森林は国民にとって大切なんだ。どのように大切かと言えば、国土保全、水源かん養、大気浄化等で重要だし、人間の自然応用、森林浴も重要、したがって森林を大切にすべきだというコンセンサスが出来ているように思える。そういうことが大前提にあるということで、問題の本質から少し離れた形で、私の考えを話したほうが関心をもっていただけるのではないかと思って出かけて来ました。

三全総の思い出

私は、国土計画づくりで一全総から四全総まで関係してきたが、関係する度にポストが違った。若い時代に一全総に関係し、三全総は局長の時、四全総は役所を卒業して審議会の委員、五全総は審議会の部会長をおうせつかった。これらの中で、局長の時に直接担当した三全総の思い出が非常に大きい。

三全総は、高度成長期を経て、人々に落ち着きがなくなってしまった。農山村の若い人の多くは機会があれば都会へ行きたい、農林水産業は将来が絶望的で、自分だけはやるけれども、子供たちには農林水産業を継がせないというような状態。それでは、都会へ出て落ち着いているかという、入学試験は大変、入社試験も大変、お互いの競争が激しい、住宅は2DKで一生活む気分ではない。というようなことで、1億2千万人みんなが落ち着かないという時に定住圏構想を打ち出し、定住

させるための条件は何かで、ある仮説を設けたのが三全総。それはGNPが大きくなり、交通・通信体系が整備されようとも、人間の気持ちが落ち着くことはないのではないかという発想であった。

明治以来、鉄道から新幹線、高速道路に至るまでの近代化に対して、一度水系に話を戻して人間の定住性を考え直してみようということで、国土を交通体系で管理するのではなく水系で管理しようという提案した。これは勉強すればするほど、江戸時代に話が戻っていくことがよくわかった。江戸時代の日本は、全国300諸侯が水系管理の下で自分の国を造っていた。したがって、明治維新以来の都道府県制や市町村制を止めて、江戸時代に戻って300諸侯の国を自治体にしようと言いだした。その一つの定住圏は山があり、森があり、懐かしい里山があって、畑や水田が出て来て、城下町があって、港町となって海があるというような水系、上流から下流へ一貫したエリアとして国がある。それは定住性を確保するうえで意味があると言った。この構想は抽象的にほめられたが、実務では誰も関心を持ってくれなかった。林野庁もあまり賛成ではなかった。交通主義が優先してしまって、林道でも輸送体系としてしか考えないで、定住性の水系型の林道論はむしろ否定され、スーパー林道で山を越えて市場に運ぶことが林道論の基本になって、日本は水系主義を言ってもだめだという敗北感に陥ったのが三全総の思い出です。

四全総では、水系について書くのを止めて情報化、国際化というテーマに切り替えた。五全総ではどうするかという時に、三全総の宿題はどうするのかということが、三全総に関係した者の共通の願いだが、そここのところがまだ見えて来ない。ただ、多少面白くなったと思うのは、三全総の後、森林法が改正されて流域管理を言い出し、所有者別の管理ではなく水系別の森林管理をしようというので、「ひょっとすると」と思ったが、内容の説明を聞けば聞くほど、行政の実態は流域管理型になっていないで公益管理型と言ったほうがよい。その公益も基本は交通体系に行ってしまうという悲しい感じで、流域管理型の森林論というのは、日本の国土計画ではなじまないのかと、嘆いていることを最初に話したかったわけで、私が担当した仕事のぼやきであって、ぼやいている間は、森林に関して何を言ってもおそらく駄目ではないかという感じがするので、今日話をする元気が本当のところないのが実情です。

林業に関する提言がたくさん出ているけれども、基本が踏みはずされているんじゃないか。本来の林業論を論じようとする人がいなくなって、関連する公益についての価値だけを論じて、それがお金になったら林業もちょっと命拾いするというような発想の議論が多くて、本来の林業に、面白さや自信をもった意見が専門家なるほどない時代になったんじゃないかという感じがする。今私は、林業専門家と語ることを止めて、小さい子供と漫画の世界に入り込んでいる。漫画の世界で子供に森のことをわかってもらうことが、森林を守る私の仕事なのかとさえ思っている。ちょっといやみを含めて、そういうことを最初に言いたかったわけです。

通勤型の林業はどうか

山村に人がいなくなるというテーマで結論から言うと、「なんでいけないの」ということで議論

してみてもどうか。山村に住んでいる人を見て、ここに住むべきだという元気はないというのがすべての原点で、親切に町場に下ろしたいと思うのが、山村へ行ったときの本音だ。それが東京で議論すると、過疎化が進むことが罪悪で、人々が山村に住まなくてはいけないと大声をあげて、自分では行かないという人ばかり。そこが解せないテーマで、本当のことを言うと、みんな山を下りたらどうかということで正直な話し合いが必要ではないか。その中で「私はここで死んでもいいから山にいたい」と言う年寄りがかかりいる。これは価値観として非常に貴重なことだと思う。そういう方々が、一人ひとりと山を下りて行くのに対して、孤独になって人生を全うするのはどうしたらいいか、真剣に議論してみたい。過疎法で補助金があればいいというようなことでは、決して満足してもらえない実態にあると思う。

山村にどういう人がいるかという歴史を語っていくと、人間と国土との関係はそんなに簡単ではない。日本の縄文時代の人々はどのように住んでいて、弥生時代にどのように移住して行ったかに、とても関心がある。それが江戸時代にどうなるかというのがあって、明治になって資本主義が発達し、産業が進むときに山へ労働力を連れて行ったのは誰か。鉱山師とかパルプ業者あるいは鉄道の枕木業者といった人たちが連れて行った。産業が変質すると、その人たち（労働者）を山に残してしまった。そういう山村がいっぱいある。

戦後は、入植者を大勢山に入れ、悪戦苦闘して開墾し、そして農業政策としてはあまり軌道に乗らないまま入植者を残してしまったという現実がある。ところによっては、歴史的に平家の落武者の人もいるというようなことで、山村に住む人は非常に複雑な歴史をもっている。こんにち、そうした歴史の残留組ともいうべき人々のことも、われわれとしては相当認識しておく必要がある。

若者が山村から流出することを、いかにも問題のように言う人がいるけれども、山村に子供を置いておく親がいるとしたら、よほど考え方が崇高な方か無責任な人となる。子供はぜひ町場でよい高校へ行って、都会で暮らしてほしいと思う親のほうが常識的かもしれない。それを淋しいかと聞けば、淋しいと答えるに決まっている。けれども、それでいいんだと思う親が相当多いであろう。

三全総の定住圏のとき、その議論をした際に行政的な計画として、通勤林業ということについて議論したことがあった。山では生活できない、山を下りよう。生活基盤を都市において、通勤して森林を管理する。その通勤に対して助成するほうが効率的ではないか。スクールバスと同じように、通勤という交通手段について助成を考えてはどうかと提案したことがあった。ところが、けしからんと非難されてしまった。「山に住むのが本質で、住みたいと言っているのに、山から強制的に下ろすのはなにごとか」と叱られ、「御免なさい」と言って止めてしまった。それは今でも、そうしないと山へ入る労働力を確保することは考えられないんじゃないかと思っているけれど、どうもだめなようだから、悔し紛れに皆さんに言っているわけです。

余談になるが、中国のウイグル族と勉強会を持った時、彼らが本格的に悩んでいた。何を悩んでいるかと言うと、動物と子供と一緒に暮らしていて、子供は親とか伝統を見ながら鍛えられていく

構造で生活が成り立っている。ところが、中国の近代化が始まり、近代的な教育と近代的な産業への就業がテーマになった。すると、親たちは迷ってしまう。自分と同じ古い伝統の下で放牧を続けることはどうなのか、犯罪なのかと聞いたウイグル人がいたけれども、みんな迷っていた。自分だけが放牧して、妻子を町に定住させるという一族も出て来ているが、全員引き連れて放牧して歩いている一族もいて、どうしていいかわからない。これはかなり深刻なテーマだと思うし、日本の山村でも同じだと思う。

木の文化論に異議あり

木の専門家が書いた書物を見ると、どなたも「日本は木の文化で素晴らしい」と書いている。誰もそう思うし、それで間違いないと思うけれども、私はいかがわしいと思っている。なぜかというと、木の文化というのは地球上のすべての民族に共通のものだということを、もう一度復習したほうがよいと思う。ヨーロッパでも木の文化から石の文化が出て、20世紀にコンクリート文化が出て来たという歴史であって、歴史をひもとけば、木の文化でなくて暮らした人は一人もいない。砂漠の中に住んでいる人も、歴史をたどれば木の文化をもっていて、人類が地球との関係で生きざまを作ったのは木の文化だということまで認識を戻さないと、木の文化の議論は本格的でないので、日本が木の文化だという発言には随分注釈をつけなければならない。注釈をつけるとしたら、「木の文化を成熟させることに失敗したので、未だに木の文化です」と言ったほうがいとさえ思うので、日本は木の文化について復習し直さないと、森林問題と木の文化はつながらないと思う。

例として適切かどうかかわからないけれども、「ツーバイフォー工法でも木の文化と言うのかね」というあたりから話は混乱してくる。木の文化とは、地球に人間が住む「なりわい」全部を言っているのであって、輸入した木材で家を造ると木の文化というところは、私は信じない。私も建築屋なので木造建築に関心があるけれども、正しい木の使い方を知っていて木造建築を建てられる大工はいないのではないか。つまり、木の文化を知る大工がゼロの社会で、木の文化と言っているのは滑稽に思えて、古い木造建築の専門家や大工の友人に「あんたらペテンだ」と言うと、「それはそれしかない」と言う。古い建築を修理するときに、木の表と裏を逆に使っても平気な大工がいっぱいいる。木造建築は、森に生えていた木の姿そのものを反映させなければ、正しい木の使い方にならない。ツーバイフォー工法だけで造ると、森の中に生きていた木の姿が反映されない哀れなものになってしまう。寺の建物に見られるように、森全体として自然との関係が出来ているのをを学んでそのまま建物にするというのが、木の文化の建築論なのだけれども、今は強度と形だけで建てているから、森が建築になったという議論はどこにもない。そこで、木の文化を語る人たちにボールを投げ返している。そのうちに、日本の木の文化は、20年に一度建て替えるようなことだと言うようになって来た。これは一体なんなのかというのは、また大論争点だと思う。

歴史学者に言わせると、日本人のケガレという意識がテーマになる。汚れた建物を壊して新しい建物にする思想だとか、箸は他人が使わない割箸で食べるほうがいいというような、ケガレに対す

る日本人の思想があって、それが木の文化につながったということが論じられている。

一方で、木は再生産されるというメカニズムの中で、建て替えが可能であったというような議論が、日本的な木の文化論として出て来ている。その時には、建て替わることだけが中心になって、伊勢神宮でも20年毎に建て替えることだけが残って、建て替えるべき森との関係を厳密に議論する人はいなくなった。木材が足りなくなったらどこかの山で探したり、外国から買って来ようというようなことをして、20年毎に建て替えることだけが形骸的に残るとするのは、本当の木の文化ではないのではないか。

日本でも西欧でも、木で出来た家具や筆筒は、人間にとって永遠を意味していた。木を切って筆筒や椅子にしたときに、木は生き返ったと見ることが木の文化です。人間は死のうとする木を切って、筆筒や椅子にして、木の生命を蘇らせたという思想があって、蘇らせた木の魂、生命を何百年も置いておきたいと願っていた。それが木の文化の思想的な原点だと思う。ところが家具メーカーの方に聞きますと、ワンルームマンションの若者向けは5年の目標で造るという。家具を買って5年で粗大ごみにするというので、寿命の長い高価な物は造れないという。木の文化を浪費の方向へもっていつているのが現在です。それは木の文化を否定するもので、人間が森を大切だと思う根拠から離れてしまう。それでも、北欧の高価な家具を買う人がいる。国内でもいい家具も多少造られているけれども、産業的にいい家具を造るより若者向けに数年の寿命の家具を造る方向へ流れてしまう。そこには木の文化が残ることはあり得ないのではないか。

今日はジャーナリストの皆さんなのであえて言うと、新聞は一体なんなのか。木の文化の中で、新聞論を書いた記事を見たことがない。ときどき古紙回収がうまくいかないなんて記事が書いてあるだけで、森林と新聞の関係の記事を見たことがない。これは、私の不勉強が理由だと思う。多くの情報を新聞が媒介として伝えている時に、木の文化として、森林として新聞を語ることがもっとあっていいのではないかと思う。

八方ふさがりの国有林

土光さんが臨調におられたときに呼ばれて、「君の任務はひとつだ」と言う。「なんですか」と聞きますと、「たばことかJR、NTTは民営化ということで行政改革をやっている。これは重要だからやらなければいけないけれども大変だ。しかし、君はそんなことを考えなくてよろしい。やる人は大勢いる。21世紀に鉄道があるかないかわからないのに、鉄道会社の合理化やっているのも滑稽だ。電話も全然違うのではないか、東芝で技術を語っていても21世紀には今のような電話の社会ではないだろう。そうなれば当然NTTの形も変わるに決まっている。しかし変わらないのは森林だ。日本の森林は日本の国土に住む人たちによって管理されるのは現実であって、臨調の最後のテーマは森林をどうするかにある。そういう基本的な哲学から林野庁をどうするか、一案をすぐもって来なさい。」とおっしゃる。私はすぐ出来ないで、「10年後に持って来ます」と言いましたら、「おれは死んでいる」と、おっしゃいましたけれども、未だにその宿題を果たしていなので気になっ

ている。

国有林をどう見たらいいのかは、とても大きなテーマで、その議論も、いかに駄目かということだけに集中していて、頭のいい人ほど解決策がないことを上手に説明するようになり、聞けば聞くほど、どうにもならないということで論議しているように私には思えてならない。なにかちょっとでもやれることを考えてみるのが重要だと思っている。ではどういふことがあるかと言われても、私にはわからないので、林野庁の若い人に「それを考えないと林野庁にいる意味がない。」などと言うと一生懸命勉強している。最近若い一人が「森林都市論」を言い出した。しかし、純粹にやろうとすると構想が実施出来ない。構想と現実の中で、若者が揺れ動いている。そういう若者たちを助けようとする人も、なかなか出て来ない状態で、国有林は八方ふさがりになっていると思っている。しかし、広大な森林を持っており、その資産を生かしきれないのはサボっているか知恵がないのではないかと林野庁長官に言うと、「あまり激しいことを言わないで下さい」と言うので、これ以上言わないが、国有林は大変だと思う。

山村に住む夢物語

奇想天外のことに話題を移したい。

二十（はたち）代で東京が普通になっている。どこで生まれても二十代で東京というのが日本の国土論なわけで、二十代の3人に1人が東京に住んでいる。これは世界で例がなく、人類にもそういう経験はない。東京一極集中はビジネスとか官庁が原因だという人があるけれども、そういうことは全然ない。現在の東京一極集中の最大のテーマは、若者が東京へ集まることで、3人に1人が東京で成人式を迎えるのはなぜかを議論しなければならない。

三十歳過ぎてから、価値観が非常に多様化してきている。一生東京がいいという人も過半数いるが、外国に出る人、地方都市を好む人、自然に帰りたいという人もいる。若者ほど居住の選択の幅が広がっている。東京で見ているとわれわれのジェネレーションは、年をとるほど集中型になっているのに、団塊の世代は人数は少ないけれどもは少しずつ分散型になっている。

山村の活性化を考えると、二十代で東京へ出た人々のうち、ほんの一握りでも山村に戻りたいという価値観の人が出て来ていることだけは確かであって、それが例外的なために潰されるとか、受け入れ態勢が地元に来ていないことはある。しかし最近、廃屋を売るとか便宜を図るところも出て来た。私は二十代東京、三十過ぎて山村という人が何人か出ることに興味をもっている。そのルールがどのくらい延びるかで、山村活性化の意味合いが違ってくると思う。私たちの山村の活性化対策は、残留組の高齢化対策だけで、福祉型の救済政策でしかないという悲しい思いでやっているけれども、二十代東京組が山村に入るというテーマを取り上げるとすると、全然違ったテーマになる。

時代の進歩の中で生まれて来た若者たちが、山村を選択することが本格的でない限り、日本人が森林は大切だというのは、ウソだと思ったほうがいい。これは農業でも同じように考えている。後

継者問題は、そういう議論につながっていかないと、21世紀の農業も山村も駄目だと思う。

山村へ行った人たちをバックアップすることをテーマに、非常に空想的な議論をしたいと思っている。それはコンピューターに支えられた山村をつくりたい。教育、医療、事務処理、市場との関係などすべて電子的なネットワークで処理するレベルで山村を考える。二十代東京の人が、そのトレーニングを終えて山村に行き行って装備し、一人でも山村で生活出来る構造ができないか、それが出来ればトフラーの上を行くものと、空想的に思っている。第三の波どころでなく第四の波で、山村は素晴らしい人が住むところにならないだろうか。その人たちは優れたハードウェアに支えられ、家族とともに本格的に自然の中に住み、知的な供給を完璧に受けているという夢物語は出来ないものかということで、21世紀の山村論をやると限りなくデタラメな思いが出てくる。デタラメも20年間言うともものになるというのが私の哲学でして、戦後20年間言い続けたもので、出来なかったものはないと自分で誇りに思っている。ちょっとやそっと言ったって世の中変わらないが、百万べん言えば世の中変わるというのは古来仏教の哲学でして、日本人が山に住むというテーマを21世紀に向けて20年間言い続けたら、どこかで実るのではないかと言っている。そしたら、先日、奈良とか三重の林業家の青年たちが、もうやっているという。東京で商社マンだった人が、コンピュータを山へ持ち込んで、父親の森林を管理しているという青年も出て来ている。子供の教育もテレビで通信授業はどうか、医者も山村にいるより、町場の優秀な医者がテレビで診断し、危険なら救急車がすぐとんでくるようなシステムを作ってはどうかなどと考えると、夢はだんだん広がって、山村や森林には価値があると言っても、あまりウソではないと言えるのではないか。

山村や林業の専門家を前にして、聞かれようによっては罵詈雑言みたいになってしまったが、実はそうではなくて、なにかポイントが欲しい、そのポイントが専門家の皆さんから出て来た時に、五全総でそれをポイントとして作ってみたいと思って作業を始めている。一全総から時間をかけて計画を作り、出来たものを閣議決定してプレスに発表するやり方であったが、五全総は閣議決定前はかなり公表していろんな意見を聴いて、直すべきところは直して最後に閣議決定にもっていくやり方しているので、五全総をテーマにしたが、閣議決定までに最低3年、問題が難しくなれば5年かけるつもりなので、皆さん方から五全総での山村活性化にポイントになる提案を作っていただきたい。21世紀につなぐ五全総になるので、提案をお願いしたいばかりに、ドギツイテーマをいくつか取り上げ、ドギツイ話をしたので、あまり機嫌悪くしないで下さい。

ご清聴ありがとうございました。

(文責・吉藤 敬)